

一八八一年一月一日(土)

ドツキネーシヨル
南神村でケーシヤブと共に

一八八一年一月一日、土曜日——ベンガル曆一二八七年ポウシユ月十八日

ブラフマ協会の年次大祭の数日前のこと。プラタブ、トライローキヤ、ジャイゴパール・センたち大勢の協会員を連れて、ケーシヤブ・チャンドラ・センが聖ラーマクリシュナにお会いするため南神村ドツキネーシヨルの寺に來た。ラーム、マノモハンほか、大勢が同席していた。

会員たちの多くが、ケーシヤブが到着する前にカーリー寺へ來て、タクルの傍に坐っている。皆、それぞれ落ちて着きなく、南の方角ばかり気に見つめている——いつケーシヤブが來るか、いつケーシヤブの乗った汽船が着くかと待ちかねているのだ。この指導者が來るまでは、部屋の中はいたつて騒々しい。

とうとうケーシヤブがやつてきた。手にはベル(ビルヴァ)の実を二つと花束を一つ持っている。ケーシヤブは聖ラーマクリシュナの足にさわってから持参したものをそばに置き、うやうや恭々しく額かかずいてタクルを拝した。タクルも同様に返礼をなさった。

聖ラーマクリシユナは嬉しそうに笑つておられる。そして、ケーシャブと話をなさる——

聖ラーマクリシユナ「(笑いながら) ケーシャブ、あんたはわたしに会いたがつているが、あんたの弟子たちはそうじゃないらしいよ。今、あんたの弟子たちに言つてたところさ——『さあ、皆でワイワイしよう。その後でゴーヴィンダが現れるから——』つてね。(訳註、ゴーヴィンダ—クリシユナの一名) (ケーシャブの弟子たちに向かつて) ほーら、お前たちのゴーヴィンダがおいでなすつたよ！ わたしもこんなにヤキモキしていたんだ。お前さんが来ないもんだから盛り上がらないんだよ(一同笑う)。

ゴーヴィンダに会うのは簡単なことじゃない。クリシユナ劇を見てみる、ナーラダがヴラジャに入つてきて夢中で恋い焦がれる様子をしてこう言う——『おお！ ゴーヴィンダ、わが命の君よ！』すると、牛飼いの少年といつしよにクリシユナが現れる。女友だちや乳しぼりの女たちが後からぞろぞろとついてくる。夢中で恋い焦がれなくちや至聖かみさまには会えない。

(ケーシャブに向かつて)——ケーシャブ、お前、何かお言ひよ。これたちは皆で、お前の話を聞きながらがつているんだよ」

ケーシャブ「(謙虚な態度で笑いながら) 此処で話をするなどと——まるで、鍛冶屋かじのそばで針売りを始めるようなものです」

聖ラーマクリシユナ「ハッハッハ……でも、信者の性質は大麻吸いによく似ているよ。さあ、あんた、一服吸いなさいよ。そしたら私も一服吸うから——(一同笑う)」

午後四時、境内の音楽塔ナハバトから音楽が聞こえてくる。

聖ラーマクリシユナ「(ケーシヤブたちに向かつて)美しい音楽だろう。一人が笛でポーと単調な音を出していて、もう一人がいろいろなラーガ・ラーギニーを奏でている。わたしもあれと同じでね……。わたしの笛には七つ穴があるのに、ただポーとだけ鳴らしているなんて——ただ、^ソーハム、^ソーハムとばかり唱えているなんて……。わたしは七つの穴をつかっているんなラーガ・ラーギニーを奏でるよ。ただ、ブラフマン、ブラフマンとだけ言っているのは真つ平ごめんだ。平穩^{シヤンタ} 召使^{ダール}、^ブラフマン、^サワキヤ、^マドフ、親子、友人、愛人と、この五つの態度であの御方を呼ぶんだ(神に対する五態——神と楽しみ、神と遊ぶんだ) (訳註、ラーガ・ラーギニー——インド音楽の旋律の様式、^ソーハム——それ(=梵)は我なり)

ケーシヤブは感動して口もきかずに、ただこの言葉を聞いていた。やがて、こう言った——「智識と信仰について、いままでこれほど権威ある、しかも美しい解釈を聞いたことがない」

ケーシヤブ「(聖ラーマクリシユナに向かつて)——あなた様はいつまでも、こうして隠れていらっしやるおつもりですか——間もなく人々が群れをなして集まってくるでしょう」

聖ラーマクリシユナ「おや、何を言うんだい。わたしは食べて飲んでいるだけ——。そして、あの御方の名を唱えているだけなんだよ。人が来ようと来まいと知ったことか。ハヌマーンは言った——^私は日や月や星座の吉凶のことなど何も知らぬ。ただ一つ、ラーマのことだけ考えている」と、ケーシヤブ「そうですか。では、私が人を集めましょう。あなた様の住んでおられる此^この場所に、皆が来なくてはいけなくなるでしょう」

聖ラーマクリシユナ「わたしは、皆のゴミについてる、そのまた塵^{ちり}ホコリだ。わざわざ来て下さる

と言うのなら、どうぞいらして下さいな」

ケーシャブ「あなた様が何をおっしゃろうと、あなた様のいらつしやるのが無駄になることは決してありません」

聖ラーマクリシユナ、^{ドッケネーシヨル}南神村で信者と共に

一方では、キールタンの用意ができていた。大勢の信者たちがそれに加わった。五聖樹パンチャパタイの杜ドからキールタンの行列が南へ向かって来る。フリタイが角笛シソガを吹いている。ゴーピーターダースが長太鼓コルをたたいている。そして、二人の信者がカルタル(小さいシンバル)をならしている。

聖ラーマクリシユナが歌をうたわれた――

人よ、幸福でいたいなら

ハリの御名おんを繰り返し

この世で幸福の一生おくり

そのあと天国ウアイクタクへ行かれて

その上いつも自由でいられる

ハリの御名おんの偉大さよ

シヴァが五つの口で練り返す

ハリの名を今日お前にあげる

聖ラーマクリシュナは、獅子のような力強さで踊っておられた。そして間もなく、三昧に入られた。三昧が解けた後、自室にお坐りになり、ケーシャブたちとお話をなさった。

〔全ての宗教ダルマの調和〕

「あらゆる道を通つてあの御方をつかむことができる。ちょうど、お前たちがこの寺へ来るのに馬車に乗ってくる人もあり、ボートか蒸気船で来る人もあり、または、歩いて来る人もある、というようなものだ。自分の好みと生まれつきの性分に応じて、それぞれの方法で来るんだよ。目的地は一つだ——先に着くか後で着くかの違いだけ」

〔見神の方法は——自我の放棄〕

「(ケーシャブたちに向かつて) ウパーデイがなくなるほど、あの御方がそばに来て下さる。高い土手には水は集まらない。低い土地に集まる。そんなふうには、あの御方の恵みの水は、高慢などころには集まらない。あの御方の前に、人はできるだけ低い謙虚な態度でいるのがいい。(訳註、ウパーデイ——肩書きや称号など。例えば——私は学者だ、私は何某の息子だ、私は金持ちだ、私には身分がある。)

よくよく注意しなければいけない。着るものさえも慢心たぬの原因になる。脾臓肥大の病人が黒い縁取りの腰布を巻くと途端に、ニドゥ旦那バドゥの軽い歌をうたい出したのを見たよ。

ブーツをはくと途端に、英語をしゃべり出す人もいるよ！

ふさわしくない人間が赫土色あかつちの衣(僧衣)をつけると高慢になる。ちよつとばかり軽く扱われただけで腹を立ててムツとする」

〔欲望が尽きて神を熱望し、そして見神〕

「熱心にならなくては、あの御方に会うことはできない。この熱心さは、いろいろな経験(人生の悲苦)を卒業した後でなければ起きない。女と金に囲まれて生活していて、まだ、それらが原因で起こるさまざまの経験を卒業していない連中には、神を恋う情熱は芽生えない。

郷里くににいたころ、フリダイの息子が終日ひねきわたしのそばで暮らしていたことがある——四つか五つの子だったが……。わたしの前でいろんなこととして夢中で遊んでいて、ほかのことはすっかり忘れていゝる。ところが、日が暮れると途端に、『母ちゃんとかへ行く』と言ひ出すんだ。わたしはどうにかしてだまそうと思つて、『ハトをやるよ』とか何とか言うんだけど、その子はそんなことではだまされない。泣いて、泣いて、『母ちゃんとか行くー』もう、どんな遊びもその子の気を逸そらせることはできない。そんな様子を見ると、わたしも泣いてしまったものさ。(訳註、フリダイ——その頃、タクールに仕えていた甥わい)

こんな子供のように神を求めて泣くことだ——この熱心さだよ。もうオモチャも食べ物も関心がなくなる。人生の経験をし尽くすと熱望が芽生えて、こんなふうに神を求めて泣くようになる」

一同は感動して声もなく、これらのお話を聞いていた。

日が暮れて、使用人がランプに火をつけていった。ケーシャブたちブラフマ協会の一行に軽食を出す用意がととのっている。

ケーシャブ「(笑いながら) 今日もムリですか?」(訳註、ムリ——塩味のボン菓子のような食べ物)

聖ラーマクリシュナ「ハハハ……。それはフリダイまかせさ」

皿代わりの葉が並んだ。先ず最初にムリ、その次にルチ、そのあとで野菜のカレーが出た。皆は大そう喜び楽しく笑った。すべてが終わったのは十時を過ぎていた。

タクルは五聖樹パンチャバタイの柱に協会員たちといっしょに行つて、お話をされた。

聖ラーマクリシュナ「(笑いながら、ケーシャブをはじめとする協会員たちに) 神をつかんでから、世間へ出て上手に暮らしていけるよ。(かくれんぼの) 鬼婆にさわつてから、あそびをつづけたらいい。神をつかむと、信者は無執着になるんだよ——泥魚みたいだね。泥の中に住んでいても体に泥がつかないだろう」

夜の十一頃になって、一同は家へ帰るためソワソワしはじめた。プラタブが、「今夜はここに泊まっていけますか」と言う。

聖ラーマクリシュナがケーシャブに、「今日は此処こゝに泊まりなさいよ」とおっしゃる。

ケーシャブ「(笑いながら)用があるものですから——。今日は帰らなくてはい——」

聖ラーマクリシュナ「どうしてさ、自分の魚カゴの匂いを嗅がなけりゃ眠れないのかい。魚屋の女が花屋の友だちの家に泊まった。部屋にある花の香りで魚売りの女は眠れない(一同笑う)。いつまでもモゾモゾしているので花屋が声をかけ——『どうしたの? 眠れないようだけど、どうかしたの?』すると魚屋は答えた。『どうしたんだらう。花の匂いが鼻について眠れないのかしら? あんた、私の魚カゴ、持ってきてみてくれない?』魚売りの女は自分の魚カゴに少し水をかけ、顔の近くに置いてその匂いを嗅ぎながらぐっすり寝込んでしまった」(一同大笑)

別れるとき、ケーシャブはタクルの足にさわり、そばに献じてあった花を一本いただき、地に額ずいて拝し、ナヴァビダーン、万歳と会員たちといっしょに唱えた。(訳註、ナヴァビダーン——ケーシャブ・センが設立したナヴァビダーン・サマージ(新摂理協会)のこと)

ブラフマ協会の一行は、ジャイゴパール・センの馬車にケーシャブを乗せてカルカッタに帰っていった。